
必修科目「英語 A・B」の結果について

- 2015-2016 年度のスコアから -

安尾 正秋^{†1}, 中山 文^{†1}

On the Results of Required Subjects "English A and B" :

From the Scores in 2015-2016

Masaaki YASUO^{†1} and Fumi NAKAYAMA^{†1}

1. はじめに

当時の学部長・教務委員長の発案で 2010 年度からの導入が進められ、英語担当教員による運用が始まった 1 年生を対象とする英語統一授業は、前期科目「英語 A I・B I」をクォーター制で実施し、後期科目「英語 A II・B II」をセメスター制で実施している。そのうち必修科目である「英語 A I・B I」は、週 2 回のペースで、中等教育で学習した文法事項の復習を中心とした内容(英語 A I)と、後期に行う TOEIC 対策への移行を含め、リスニング対策を取り入れた内容(英語 B I)から成っている。

クラス編成については、入学式前後のガイダンス期間に実施する「英語能力判定テスト (TOEIC Bridge IP)」の結果をもとに 3 レベルに振り分け、各学生の英語能力に応じたレベルのクラスで学修を進めるようになっている。統一授業導入当初は各学科 3 レベル (3 クラス) で、6 学科合計 18 クラス編成で実施していたが、授業担当者の確保が困難となったこと、学部入学定員の見直しなどの理由を受けて、現在では 2 学科合同 3 レベル (5 クラス) で、合計 15 クラス編成としている。将来的に入学定員減となった場合、開講クラス数を減らすことが容易であるとの予測に基づく再編であったが、その後も入学定員増となり、それにともない各クラスの履修者数が増加傾向にあるのが実情である。3 レベルの構成は「発展クラス」「基礎クラス」「導入クラス」から成り、英語力中位層の入学者が多いことから、中位の「基礎クラス」を 3 ク

^{†1} 近畿大学工学部教育推進センター

ラスに、上位の「発展クラス」と下位の「導入クラス」は1クラスずつの開講としている。各レベルの履修者数について、参考までに下記に示しておく。

		学科					
レベル	建築・電子情報		機械・ロボティクス		化学生命・情報		
発展	約 45 名		約 45 名		約 40 名		
基礎	前期	後期	前期	後期	前期	後期	
	約 40 名	約 45 名	約 40 名	約 50 名	約 35 名	約 45 名	
導入	約 25 名		約 25 名		約 25 名		

(「基礎クラス」の3クラスには、後期から再履修者が加わる。)

こうした3レベル構成の習熟度別クラス編成ではあるものの、統一授業であるため、授業のテキストと中間テスト・終了テストは統一したものを使用し、授業内容・進度及び評価項目・方法も統一して実施している。

今年度で実施して8年目を迎え、この間、使用するテキストやテストの内容について毎年検討を重ね、必要に応じて見直しを進めてきたが、2015年と2016年度については同じテキストを継続使用し、また、授業担当者の大きな変更もなされなかったことを踏まえ、この2年間について可能な範囲内でTOEIC Bridge IPスコアの推移を比較検討し、それらに考察を加えて、今後の授業改善に役立てたいと思う。

2. 「英語 A・B」について

前期科目「英語 A I・B I」はクォーター制で実施しているため、前期は月1回のペースで、統一試験（中間テスト・終了テスト）を土曜日に行っている。後期科目「英語 A II・B II」はセメスター制であるため、7-8週目に中間テストを、16週目に終了テストを実施している。2015-16年度の各テストの平均点を表1にあげる。（「英語 A I・B I」の中間テストのみ90点満点で、その他は100点満点である。）

表1 2015-16年度の各テストの平均点

	英語 A I		英語 B I		英語 A II		英語 B II	
	中間	終了	中間	終了	中間	終了	中間	終了
2015	64.1	72.9	66.2	60.1	69.33	63.44	62.61	64.47
2016	65.85	72.56	69.53	63.31	70.2	63.95	64.22	64.63

この2年間において平均点は全体的にあがっており、2014年度とくらべても平均点は伸びている。「はじめに」で述べたとおり、この2年間は使用テキストや授業担当者の大きな変更は行わなかったため、これらを比較検討する上で条件は整っているといえよう。これら2年間のテスト結果にみられる共通点として、前期「英語AⅠ」は中間テストから終了テストにかけて平均点が約8点伸びているのに対して、「英語BⅠ」では平均点が約6点下がっている。「英語BⅠ」の授業内容が、初めて取り組むTOEIC Bridge対策であることも関係しているだろうが、そのほかに、「英語AⅠ・BⅠ」がクォーター制で行われるため、4-5月に履修する「英語AⅠ」に対し、6-7月に履修する「英語BⅠ」においてはやや中だるみすることも影響しているのではないかと考える。履修者の出欠状況についても、「英語AⅠ」にくらべて「英語BⅠ」においては欠席者が目立ち始め、中には定期テストを受験しない学生も出ている。第2クォーターの時期に中だるみすることなく学修を進め、引き続き後期授業に臨むような対策を講じる必要がある。

表2 2015-16年度の各テストの最高点と最低点

	英語AⅠ		英語BⅠ		英語AⅡ		英語BⅡ	
	中間	終了	中間	終了	中間	終了	中間	終了
2015	24-88	27-99	18-87	20-94	16-97	10-94	10-93	20-95
2016	15-89	23-98	26-89	25-89	20-95	16-93	20-92	24-96

(上記のとおり、「英語AⅠ・BⅠ」の中間テストのみ90点満点で、その他は100点満点である。)

上の表2は、各テストの最高点と最低点である。これらは一部の学生によるテスト結果にすぎないものの、入学時と、その後一年間を通して変わらない英語力の差があることを示しており、同じ評価項目・方法で進める統一授業について引き続き検討していく必要があると考える。

次章では、必修科目「英語AⅠ・BⅠ」の再履修の現状について述べていく。

3. 「英語AⅠ・BⅠ」再履修について

各授業の再履修については、必修科目である「英語AⅠ・BⅠ」がクォーター制であることもあり、1年生を対象に後期5限目に、各科目原則1クラスを開講し、2年生以上の再履修者には前期5限目に、同じく各科目1クラスを Semester制で開講している。1年生対象の後期授業については、前期授業と同

じテキストを再度使用し, 評価方法も同様のものになっている. 以下, 「英語 A I (再履修)」と「英語 B I (再履修)」それぞれの現状を報告する.

3.1 安尾担当「英語 A I」再履修について

「英語 A I」の再履修クラスは後期 5 限目に受講した 1 年生が例年およそ 40 名で当該年度もほぼ同数, 前期 5 限目に受講した 2 年生以上のクラスも例年およそ 40 名で, こちらも当該年度の履修者数に変化はなかった.

授業内容については(詳細はシラバスに譲るが), 後期クラスでは前期「英語 A I」と同じテキストを使用し, 毎回の授業で扱う文法事項も前期と同じ項目についてさらに基本的・核心的な内容に限定して復習を徹底し, コアとなる知識の修得とそれに必要な反復練習とに力点を置いた. また, 授業中の反復練習も個別の音読指導やテキスト英文の筆写といった「身体を動かしての練習」を重視し, 知識の理解より身体で身につける語学を実践してきた.

前期クラスでもこうした授業活動を通して必須事項に限定して英語を身につける学習内容にしてきたが, 2 年生以上の再履修者に 3 期続けて同じテキストを使用しては, 新たな思いで新年度の「英語 A I」に取り組む意欲を損ねるのではないかと懸念から, 新たなテキストを採用して 1 年次とは異なる文法項目の配置で再度の学修に取り組むよう工夫した.

評価については, 後期クラスでは同一テキストである点を考慮して, 授業活動(小テスト・レポートなど) 20%, 中間テスト 30%, 終了テスト 50%と通常の「英語 A I」の評価方法を踏襲したが, 前期クラスについては, 新テキストへの再チャレンジであることに配慮して, 授業活動によりウェイトを置き 30%, 中間テスト 30%, 終了テスト 40%とした.

単位修得状況については, 後期クラスの 1 年生がおおむね 70%, 前期クラスの 2 年生以上になると 80%だが, 留年する学生や出欠状況の思わしくない学生はどうしてもさらに再履修を繰り返すことが多く, 学習支援室の活用を再三促し, 授業活動として評価できる点数にカウントしようとしても応じない学生もいて, 苦慮しているのが現状である.

3.2 中山担当「英語 B I」再履修について

これまで「英語 B I」は「英語 A I」にくらべて再履修者が多かったが, 特にここ数年は増加傾向にある. 理由の一つとしては, これまで学習してきた文法事項の復習を中心とする「英語 A I」に対して, 「英語 B I」では, リスニングを含む TOEIC Bridge 対策を中心とした内容であることが考えられる.

2015 年度前期「英語 B I」を単位取得できず, 同年後期に再履修した人数は約 80 名であった. 2014 年度までは, 「英語 A I」と同様に 1 クラス開講であっ

たため、2015年度後期についても受講者約80名で授業を行ったが、この年の単位取得者は全体の58%にとどまる結果となった。再度単位取得できなかった再履修者は翌年度(2016年度)前期に再履修することになったが、3回目の履修までにはほぼ全員が単位取得に至っている。再履修を繰り返す一つの要因には、英語科目の履修方法があげられる。各学期初めには履修指導を行っているが、後期に再履修する学生のほとんどは、再履修科目とあわせて「英語AⅡ」と「英語BⅡ」を履修している。したがって、再履修の必要がない学生が週2回のペースで英語科目を受講する場合(前期は「英語AⅠ・BⅠ」、後期は「英語AⅡ・BⅡ」とは異なり、週3回以上、英語科目を受講することになり、結果的には単位取得に至らない要因にもなり得る。たとえ翌年度前期に再履修するとしても、再履修科目とあわせて、2年生対象の「英語CⅠ」や、場合によっては「英語DⅠ」を履修することになる。「英語AⅠ・BⅠ」の再履修は「英語AⅡ・BⅡ」に、さらには2年生対象の「英語CⅠ・CⅡ」の単位取得状況に波及し、「英語CⅠ・CⅡ」の再履修者も年々増加している。

2016年度後期については前年度の状況をふまえ、「英語BⅠ」のみ、再履修クラスを2クラス開講することとした。この年の再履修者は約60名であり、前年度からは減少したものの、単位取得者は全体の63%にとどまる結果であった。(翌年度(2017年度)前期には、再履修者のほぼ全員が単位取得に至っている。)

すでに述べたとおり、再履修クラスにおいては前期に使用したテキストを再度使用するが、「英語BⅠ」の場合はTOEIC Bridge対策用テキストとなっている。TOEICであれTOEIC Bridgeであれ、資格試験に対応するためにはまずはテスト形式を理解し、各形式に応じた問題の解き方を身につけなければならない。しかし再履修者の中には、すでに2カ月かけて演習を重ねてきたはずの(TOEIC Bridgeの)テスト形式を理解していない受講者が多いことから、授業各回において取り上げるテスト形式を一つに絞るなど、理解を深める上で妨げとなると推測しうる点を極力排除するよう心がけている。また、履修者数などの問題からも、通常授業では行いにくい音読や筆記なども取り入れながら、何かしらの作業を行う仕組みを模索しているところである。

4. TOEIC Bridge IP テストについて

毎年、年度末に以下の表に基づいて4月テストから12月テストへのスコアの伸長に着目した報告書を安尾が作成し、学部長・事務長に提出しているが、この機会にそれらに加筆して、より広く周知を図りたいと思う。

4.1 2015年度テスト結果について

以下の「TOEIC Bridge IPテスト クラス平均点」の表3及び表4から特徴的な差異をいくつか捉えることができる。

表3 2015年4月 TOEIC Bridge IPテスト クラス平均点

	建築	電子情報	機械	化学生命	情報	ロボティクス
上位	144.36	142.8	142.93	139.92	144.11	139.56
中位	118.03	117.68	117.09	115.09	116.61	115.35
下位	89.2	89.25	89.67	86	83.33	83.67
平均	119.58	121.69	121.15	119.3	114.56	113.21

全体平均 124.36点 (180点満点)

表4 2015年12月 TOEIC Bridge IPテスト クラス平均点

	建築	電子情報	機械	化学生命	情報	ロボティクス
上位	149.62	148.95	142.83	147.91	149.33	139.56
中位	122.52	123.36	124.94	123.3	121.09	121.23
下位	103	98.57	105.33	108.33	79.13	85.64
平均	125.84	127.17	127.6	127.92	119.26	118.29

全体平均 124.58点 (180点満点)

6学科18クラスに整理した平均スコアの内(機械工学科上位クラスと情報学科下位クラスを除く)全学科16クラスで4月テストより12月テストのスコアが高く、前後期の授業活動を通して目指したTOEICのスコアアップという目標がおおむね達成されたとと言える。

さらに、各学科で比較すると、下位クラスでのスコアアップが中位クラス及び上位クラスのそれより顕著であることが伺え、12月テストでは(情報学科を除いて)下位クラスにおける伸長が学科の平均伸び率に勝っていた。

しかも、学科横断的に比較すると、下位クラスの伸び率は(4月テストの平均が86.85, 12月テストの平均が96.67で)111.31だったのに対して、上位クラスの伸び率は(4月テスト142.28, 12月テスト146.37で)102.87, また中位クラスのそれは(4月テスト116.64, 12月テスト122.74で)105.23に比べて高く、TOEICスコアのいわゆる「底上げ」が達成されていると言える。

4.2 2016年度テスト結果について

2015年度同様、以下の表5及び表6から特徴的な差異を読み取ることがで

きる。

表 5 2016年4月 TOEIC Bridge IP テスト クラス平均点

	建築	電子情報	機械	化学生命	情報	ロボティクス
上位	144.4	143.05	142.38	140.08	142.8	138.12
中位	119.19	119.48	115.78	114.7	115.19	113.26
下位	90.75	93.45	90.31	86.75	83.88	85.33
平均	120.98	121.5	119.62	120.15	114.08	114.43

全体平均 118.64 点 (180 点満点)

表 6 2016年12月 TOEIC Bridge IP テスト クラス平均点

	建築	電子情報	機械	化学生命	情報	ロボティクス
上位	145.65	146.63	143.73	144	143.69	139.14
中位	121.1	124.26	121.2	123.47	117.34	117.96
下位	97.25	103.4	105.17	107.5	95.6	99.27
平均	122.91	126.13	124.43	127.98	117.53	119.17

全体平均 123.04 点 (180 点満点)

全学科・全クラスで4月テストのスコアを12月テストのスコアが上回り、TOEICのスコアアップという目標が前年度以上に達成できたことが確認された。

学科ごとに各クラスの伸び率を比較してみると、下位クラスの伸び率が最も高く、中位及び上位クラスが順に続く傾向も、前年度同様であった。さらに、学科横断的なクラスレベル間の伸び率の比較においても、前年度と同じく、下位クラスのそれが114.66で、中位クラスの103.97、上位クラスの101.41より高かった。

また、いわゆる「ゆとり世代」の基礎学力低下が話題になった入学年度から数年が経過したが、本学部入学者の基礎英語力に関しては、4月テストの結果に大きく変化が見られることはなく、12月テストスコアでの伸長からも入学後の伸び率に目立つ差異は確認できなかった。

4.3 スコアアップにつながった要因について

各学科・各クラスのTOEIC Bridge IPにおけるスコアの伸長から、スコアアップにつながった要因を振り返っておくことも授業改善に役立つと思われる。

第1には、比較的早期に合格した入学予定者を対象に3月に実施した「入学前スクーリング」を活用して、事前に4月のガイダンス時期にTOEIC Bridge IPを利用しての習熟度別クラス編成による授業が行われることを周知し、スクーリングの英語授業で簡単なTOEIC Bridgeの紹介を兼ねた模擬授業を実施したことがあげられる。事前にリスニングとリーディングの基礎的な問題練習を少しでも行って予備知識を与えることで、入学後の英語授業に不安や苦手意識を抱いている生徒にも、ある程度英語に自信があり意欲的に取り組もうと考えている生徒にもメリットがあったと考える。

第2には、前期にクォーター制を導入して、「英語AⅠ」では語彙・文法事項に重きを置いた授業をし、「英語BⅠ」ではリスニングの基礎練習を取り入れてTOEIC Bridgeへの実践的な対策を授業で始めたこと。さらに後期の「英語AⅡ」「英語BⅡ」ではセメスター制に切り換えて、多くの実践問題に取り組む授業を着実に行ったこと。これら2点があげられる。

第3には、統一授業のメリットを活かして、全クラスの進度を揃え、同時に中間テストを実施することで、さらには直前の授業でテスト対策を一斉に行うことで、全学科・全クラスで学生の基礎学力を把握（学生にもフィードバック）することができ、TOEIC Bridge IP対策が効率よく行われたためと思われる。

そしてもう一つは、TOEIC Bridge IPのスコアを「英語BⅡ」の評価に加えたことが、ひいては単位修得にもつながるため、スコアアップへのインセンティブともなったと考えられる。

4.4 TOEIC Bridge IPの今後の実施と活用に向けて

2015-2016年度の実施を終えて（2017年度4月テストはすでに実施済みであるが）、今後のテスト実施とスコア結果を授業にどう活かしていくかについても、いくつかの提案を含めて考えておきたい。

(1) 入学直後の4月テストから前期前半に履修する「英語AⅠ」を大学英语への導入期として位置づけ、習熟度別クラス編成・クォーター制授業のメリットを生かせる授業スタイル・教材作成・テキスト選定を今後も検討したい。

(2) 2学科合同5クラス編成での授業を継続実施し、学生の基礎英語力の推移を今後も把握したい。

(3) 1年次「英語A・B」での基礎力定着を徹底し、TOEIC対策を主眼とした授業を2年次「英語C」あるいは「教養ゼミナール」「特修プログラム」内の英語関連科目でのスコアアップにつなげたい。また、単位修得が難しい学生には「英語D」の履修を奨励し、中等教育で学習した内容の定着に力を入

りたい。

(4)「英語A・B」を再履修する学生、あるいは上位レベルのクラス以上に英語力を伸ばしてTOEICのスコアアップを目指す学生を対象に、それぞれに適した内容の学習支援プログラムを検討したい。

(5)「学生による授業評価アンケート」の結果、あるいは各教員のリフレクションなどを活用して教員間での情報共有を心がけ、各レベルのクラス内における学力差に配慮しながら意欲的に取り組める授業展開や評価方法を検討したい。

(6)「入学前スクーリング」の内容が基礎学力の確認・定着、入学後の学修内容の事前周知からグループワークを通しての意見交換・仲間づくりにシフトしたことを受けて、2017年度以降のTOEIC Bridge IPスコア及びその伸び率にどういった変化が見られるかにも注目したい。

5. おわりに

以上、2015-2016年度の統一授業「英語A・B」を通して、本学におけるTOEIC対策を中心とした英語教育の現状の一端を述べてきたが、1年生対象の「英語A・B」以外にも筆者二人が担当する英語関連科目があるので、それらの科目について最後に多少でも触れておきたい。

外国語科目としての英語の他に「教養ゼミナール」あるいは「特修プログラム」の科目群にもTOEFLやTOEIC対策を中心とする授業があり、さらに資格取得対策として工業英語能力検定(工業英検)の合格を目指す授業がある。

「教養ゼミナール」の一つとして安尾が担当しているTOEFL対策の授業については、中等教育での対応が(英検ほどではないにしても)比較的進んでいるTOEICとは異なり、ほとんどなされていないまま大学進学している国内の事情もあるので、1年生統一授業での英語学修と2年生で履修する「英語C」で修得した英語力だけでTOEFLのスコアアップにつながる授業を行うにはまだ難しいという印象が強い。2015年度も2016年度も数名の意欲的な学生が「教養ゼミナール：TOEFL iBTに備えよう」を履修し、海外の大学・大学院への進学に必要なTOEFL iBT(Internet-based Test)でのスコア取得に向けてTOEFL ITP(Institutional Testing Program)から実践練習を始めたところなので、もう少し今後の成果を待ちたいと思う。

工業英検3級については、本計先生が長年にわたり、本学を準会場として年3回試験を実施し、化学生命工学科対象「科学英語I・II」や電子情報工学科対象「情報技術英語I・II」において試験対策をしてこられた。また、中山が担当するロボティクス学科対象「科学技術英語I・II」の一環としても試験対策を行い、毎年学部内で多数の合格者を出している。また、これら公的外国

語資格試験の結果を利用した単位認定制度もあり,例年数十名,英語科目への単位認定を申請する学生がいるが,その多くが工業英検で取得した級を活用したものである.工業英検3級の場合は2単位の単位認定が可能であるが,3級受験を目指すまでには至らない学生や,1単位のみを認めている学生には4級受験をすすめる場合もある.4級は外部受験となるが,受験を希望する学生には個別指導を行っており,これまでも数名ではあるが合格し,単位認定を申請したケースもある.

公的外国語資格試験を利用した「英語A・B」の単位認定の状況をみると,1年次にTOEICで高得点を取り,「英語A・B」4単位すべて申請を行った稀なケースもあるが,ほとんどの場合,4単位のうち単位取得できていない1,2科目について,上級学年になって申請を行うケースである.1,2年次においてはTOEICに対応し得る英語学修が中心となっているが,それとあわせて今後も,学生の意欲やそれぞれの目的にあわせた学修が行えるような取り組みを模索していきたいと考えている.